

態を経て生成されるはずであり、中間形態の物質も天然に広く分布していることになる。しかしこの種の中間産物は自然にはみられない。

著者は上述の石油生成様式がこの問題に解決を与えるものであると述べている。すなわちこの種中間物質は、方向づけられた化学的過程の一定段階にだけ出現し、高温、高压の条件の下においてのみ存在するから、もちろんこの種物質はみることは不可能である。この条件の下で誘導される物質は当然物理的、化学的性質自体が変わり、その結果として生じる転移産物の初成性質も、分析および対比によらなければ知ることができないはずである。換言すれば、著者の“初成石油は、アスファルト状の物質でなく、熱分解産物を多量に含むきわめて軽い流体である。この種物質の非可逆的転移産物はアスファルトであるが、アスファルトは石油に転移しない。

著者はこのような仮定をもうけることは非論的ではないといっている。例えば鉄床の生成について熱水溶液や岩漿を仮定するように、中間産物として変成作用の非可逆的産物の実在が考えられると述べている。

著者によれば初成石油はこの種の中間産物にあたり、その形態は地質家が自然条件下で出会っている。初成石油のこの種の変成産物は、特に酸素に富む多数のアスファルトがあげられる。さらに重合作用が働いていない初成石油としては、現在みられる不飽和物に富むジャヴァ産の石油があげられる。

著者は、“初成石油”と“現在みられる石油”との中間型が多数存在するが、明確に識別されうる特性をもっていないから、区別するのは困難であると述べている。これは、“初成石油”が重合して炭素化合物に転換し易い傾向をもつ化学的に活性な化合物であるからである。

著者はこのような地球化学的立場にたつては石油の生成が容易に理解されると主張している。

月報 7 巻 8 号 正誤表

| 頁       |       | 誤        | 正         |
|---------|-------|----------|-----------|
| 9(343)  | 右上 14 | 利用されている。 | 利用されていない。 |
| 14(348) | 右上 5  | 閃母花崗岩    | 閃雲花崗岩     |
| ”       | ”上 8  | 地域のものは   | 地域、脈状のものは |